絵になる記憶

後藤正憲

今度の旅行では、いつもよりたくさん写真を撮った。と言っても、特に写真に造詣が深いわけではないから、行く先々でとりあえず目に映るものを写真に収めたと言った方がより正確だろう。コンパクトのデジカメなら操作が簡単だし、フィルムを無駄にする気遣いもない。シャッターを押した瞬間、目の前の風景がまるでゼラチンで固めたように、モニター上に停止画像となって切り取られ、保存される。写した写真の多くは後でプリントするわけでもなく、ただいつでも出してこられるという安心感を得たいのでそうしている。見た景色を所有したいという欲求の現われである。従来のフィルムを使う銀塩カメラなら、なかなかそう簡単にはいかないが、デジカメの普及でこうした欲求を満たすことが、ずいぶん容易になった。

しかし、写真をたくさん撮ったのは、ただデジカメのせいとばかりも言えない。今度の旅行では、常に十人を越える人数で一緒に行動していたために、どうしても個人的な指向を差し控えておくことが多かった。集団で行動していると、好きなときに立ち止まってじっくりものを眺めたり、好きなところにひょこひょこ行って調べてみたりするわけにはいかない。ともすると、言われるがまま連れられて、今自分がどこにいるのかさえ把握できないうちに、景色だけが次から次へと流れ去ってしまいかねない。見知らぬ土地ではなおさら自分を見失ってしまいそうな気がする。あらゆるものにカメラを向けたくなったのも、少しでも今ここと自分とのつながりを確かなものにすることによって、こうした不安を解消させようという思いが本能的に働いていたからかもしれない。

果たして一般化して良いものかどうか分からないが、人間の欲とは持ち始めるときりが無いもので、所有欲や自己保存欲を満たすだけでは飽き足らず、美的欲求にもつきまとわれた。風景を切り取ったり、自分と周囲とのつながりを確保したりするだけなら、どんな写真であろうと目の前にある物を撮ればいいはずだが、撮るとなるとやはり「絵になる写真」を撮りたくなる。

ᗢᗢᗢᗢᗢ

「絵になる写真」を撮ることに関して、井上君が並々ならぬ才能を持っていることに気付いたのは、ウラジーミルのホテルでのことだった。皆でロビーに集合するまでおよそ 30 分、何をするにしても中途半端な時間。僕は自分にあてがわれた部屋のベッドに寝そべって、カメラの再生ボタンを押しながら、撮ってきた写真を眺めていた。隣のベッドでは、僕と相部屋になった井上君が、やはり自分の撮った写真をノート型パソコンに取り込んで見ている。

――うーん、よく撮れてるなあ。自画自賛しちゃいますね！

いつもは控え目で大人しい井上君が、珍しく一人悦に入っているのが可笑しい。
――どれどれ…。
好奇心に駆られてパソコンの画面を見せてもらった僕は、思わず息をのんだ。本当によく撮れている。どこがどういいのかは分からない。特に奇を衒った風でもなく、被写体はこれまで皆で見てきた教会の建物や風景が中心である。しかし、どれも納まるべき所にきちんと納まっていて、木や建物や空の雲までが、生き生きと生気を帯びて見える。つまり、しっかりと「絵になって」いるのだ。一方、僕の写真はというと、同じ所を回って同じものを撮ったはずなのに、どういうわけか何となくのっぺりとして、どれもあまり生気が感じられない。カメラの性能に差があるとは思えないし、この違いはどこから来ているのか全く不思議だった。
きっと彼は、僕の知らない何かのテクニックを使っているに違いない。そう思った僕は、それからことあるごとに井上君がどうやって写真を撮っているのか観察して、できればそのテクニックを盗んでやろうと目論んでいた。ところが、いくら注意して見たところで、井上君はただひょうひょうとカメラを構えてはシャッターを押しているだけで、何ら変わったところは見当たらない。秘密を探ろうとすればするほど、疑問は募るばかりだった。鼻の穴を膨らませ、目をギラギラさせた僕を気の毒に思ってか、井上君はカザンで立ち寄った造形美術館のシーシキンの絵の前で、僕にそっと耳打ちしてくれた。
――この絵がヒントになりますよ。近くの物と遠くの物が同じカンバスの中に描かれていて、奥行きを出しているでしょう。こんな具合に、ね？
なるほど。遠近法！ そういえば井上君の写真も、シーシキンの絵と同様、空を大きく構図の中に取り入れているので、その分被写体の占める割合は小さくなるものの、対象を取り巻く空気も感じられるために、逆にその存在感が増している。それに比べて僕の写真は、被写体を目一杯フレームに合わせて撮っているために、それが周囲から孤立して完結し、フレームの中でこわばって見える。井上君の写真が西洋近代の遠近法に基づいたものだとすれば、僕の写真はまるで中世の宗教画のようだ。
絵画において、無限に広がる空間と、その中で任意に置かれた視点からものを見るという発想の上に成り立つ遠近法が定着したのは、ルネサンス期以降のヨーロッパでのことだった（E.パノフスキー『〈象徴形式〉としての遠近法』ちくま学芸文庫）。遠近法（perspective）は、あくまで対象物との間に垂直に交わる一つの面を透かして見た場合、そこに写る像を表す一つの形式に過ぎず、必ずしも現実世界の正確な描写を約束するものではない。にもかかわらず、それがあたかも規範めかした見方を押しつけるというので、様々な批判がなされてきた。しかし、だからといってそれが世界認識の一つのスタイルとしての効果を失ってしまうことはない。むしろ、認識のあり方を相対化するという点では、視覚だけにとどまらず、聴覚やその他の感覚を通した認知にも適用することが可能だろう（ヘルマン・ゴチェフスキ編『知の遠近法』講談社選書メチエ）。なるほど、私たちは普段気付かない間に、特定のやり方でものを見たり、音を聞き取ったりしている。

そうだとすると、記憶をたどって過去にあったことを想起する場合にも、遠近法を働かせていると言えなくもない。私たちは日常生活で経験する様々な出来事に対し、本来切れ目なく続く時間のある部分とある部分を、任意につなげたり切り離したりして、知らず知らずのうちに「絵になる記憶」を創り出している。もっとも、記憶は絵や写真と比べて流動的で、時間がたつと色褪せたり変形したりしやすいし、その一方で、デジカメ画像のように簡単に消去することができないのが、時には悩ましいことであったりもするのだが…。

さて、前置きはこれくらいにして、そろそろ記憶の再生ボタンを押して、旅の思い出がどんな絵となって描かれるのか、見てみることにしよう。

ᗢᗢᗢᗢᗢ

今回の旅行の思い出というカンバスに僕が思い描く絵の中で、主要なモチーフとなっているのは、モスクワからウラジーミルを経由してニジニノブゴロドまでの道中、僕らを運んでくれたバスの運転手である。バスをチャーターしたウラジーミルの旅行会社から、表面にドイツ語のロゴが残る中古車のバスで、モスクワのホテルまで僕たちを迎えに来てくれた。小柄できゃしゃな体つきの彼は、横縞の入った木綿の T シャツの上に、着古しの色褪せたジャケットを直接まとっている。それほど高齢には見えないが、深い皺の刻まれた顔は赤みがかっている。ホテル精算の手続が終わるのを待つ間、運転手はダークスーツに身を固めたホテルのベルボーイに何やら気さくに話しかけたが、気のない様子のボーイは、ただ素っ気なくそれに答えていた。出発前に記念写真をと頼まれてシャッターを押した後、運転手は親指を立て、人懐っこい顔でニッと笑った。

実を言うと、僕は最初、彼が酔っ払いのように赤い顔で眠そうな目をしているし、服装もどことなく汚れた感じがするので、本当に運転を任せて大丈夫かなと思った。しかし、すぐにそのような心配は全く無用だったことが分かった。ハンドルを握った彼は、とても慎重に道路の状況を確認しながら車を走らせていくので、非常に頼もしく感じられた。運転手の色褪せたジャケットの背中を見ながら、僕は B のことを思い出していた。

４年ほど前にチュヴァシの農村に滞在していた時、宿を提供してくれていたお婆さんの家の裏手に、B の家があった。彼の家族はお婆さんと仲良くしていたので、お互い頻繁に行き来していた。働き盛りの B は、以前コルホーズでトラックの運転手として働いていたが、コルホーズが経済的に破たんするとともに、ニジニノブゴロド方面に出稼ぎに出るようになった。親戚数人で車に乗ってでかけては、建設現場や住宅改修の大工仕事を個別に請け負い、仕事がひと段落ついたら家族のもとに戻ってくることを繰り返して収入を得ている。しかし、飛び込みで行ってもそう簡単に仕事が見つかるわけではない。

――「酔っ払っているのか？」って言うんだ！

雇用主が向けてくる疑いに対して、B は会って間もない僕に不平をぶちまけた。仕事が見つかるまで夜は車の中で寝泊まりするが、寝心地が良くないのはもちろん、仕事が見つか

るかどうか心配だし、家族のことも気になってあまり眠れない。もともと仕事で日焼けした肌は赤く見える上に、寝不足で目を充血させているため、酔っ払っていると勘違いされるのだそうだ。身を削るような苦労が理解されない上、あらぬ疑いがかけられることの無念さを、彼は隠しきれないようだった。

ᘏᘐᘏᘐᘏ

ところで、運転手のことで僕の脳裏に強烈に焼き付いているのが、ゴロホヴェツの女子修道院での出来事である。丘の上にそびえたつ修道院の鐘楼を見学した後、クリャジマ川を挟んで向こう岸の女子修道院に移動して食事を取ることになっていた。川には車が二台並んで通れるほどの浮橋がかかっていて、その上から人がのんびりと釣り糸を垂れている。橋の強度に問題はないようだが、両岸と橋をつなぐ部分がかなり急な勾配を作っていた。運転手は緊張した面持ちで状況を見極め、そろり、そろりとバスを進めていく。だがバンパーが地面につかえてしまうので、すぐまたギアをバックに入れて後戻りせざるを得ない。乗っていた誰もが無理だと思ってバスを下り、歩いて橋を渡って向こう岸まで行こうということになった。女子修道院は丘の上から川向こうに見えていたし、歩いてもたかが知れている。だが、僕たちの意思が運転手には伝わらず、また立ち往生するバスを見守っていた見物人が「まず乗客を下ろせ。そうすれば軽くなってつっかえずに行ける」などと言ったものだから、運転手は僕たちが下りた後に再びズズズッとバンパーを地面にこすりながら、ゆっくりとバスを進め始めた。下手をするとバンパーが下につっかえて、前のめりになったまま前にも後にも動けなくなってしまうのではないかという不安が脳裏をよぎったとき、バンパーがスーッと浮いて後輪がみごと橋の上に下りた。おかげで、僕たちは再びバスに乗り込み、対岸のズナメンスキイ女子修道院にたどり着いた。

女子修道院では、想像を絶するほどのみごとな食事でもてなされた。ウクライナ訛りの言葉で豪快に話す修道院長がテーブル正面に座り、僕たちの周りで甲斐甲斐しく給仕する修道女たちをてきぱきと指図するついでに、僕たちにも料理を平らげるように指図した。テーブルの上には、修道院の慎ましやかなイメージとはほど遠い豪華な食事が並び、後から後から運び足された。罰当たりな僕は、このとき何を食べたのか、実はあまりよく覚えていない。修道院長から一つおいてすぐ脇の席についた僕は、彼女のあっぱれな采配に気圧されて、ただ自分のお皿を空けることに夢中だった。このときかすかに思い出されたのは、やはりチュヴァシに滞在していたときによく足を運んだ、ある修道院のことだった。

ᘏᘐᘏᘐᘏ

バスが停まる小さな町から、さらに埃っぽい砂利道を歩いて 40 分ほど行った森のはずれに、それ——アレクサンドル・ネフスキイ修道院は立っていた。20 世紀の初めに創設され

た修道院は、ソ連時代には小児向けの結核サナトリウムとして利用されていたが、創立百周年を機に元の敷地内に教会が再建され、なお建物の修復が進められていた。そこには数人の修道僧の他に、見習い僧（poslushnik）と呼ばれる人たちが暮らしていて、その中には修道院から修道院へ転々と移動しながら生活している人もいるようだった。日本人という珍しい人種に興味を示して、いろいろと話しかけてきた見習い僧の A も、そのような遍歴者の一人である。彼はもともとリャザンの出身ということだったが、方々を巡った後にチュヴァシのこの修道院で暮らしていた。僕が何度目かに訪ねて行くと、すでに彼はニジニノブゴロドの方に旅立った後だった。

その A が、一度修道院の食事に招いてくれたことがある。事前に申し合わせていたわけでもなく、ふらっと立ち寄ったら通常の食事に呼んでくれたのだったが、いつもお婆さんの家で食べさせてもらっているのよりも格段に豪華な品揃えで驚いた（ちなみに、お婆さんの作ってくれる料理は質素ではあったが、味はいつもすばらしかった）。トラペーザ（trapeza）と呼ばれる共同の食事が宗教的な意味を持つこともあるのだろうが、それにしても潤沢な経済力がなければあのような食事は現実的ではない。

実際、修道院では人とお金が活発に動いているようだ。チュヴァシの人里離れた森の中にあるにもかかわらず、この修道院には建物の修復に奉仕で携わる人が入れ代わり立ち代わりやって来ていた。モスクワから来たという若い女性に、どうしてこんな辺鄙な所にある修道院に来たのか尋ねると、こともなげに「神の導きです」という返事が返ってきた。

ただ、「神の導き」による人とお金の流れは、周囲の住民の意識においては、ソ連時代の地域に根ざした経済活動と根本的に質の異なるものである。長くサナトリウムで働き、現在は引退してその一角の寂れたバラックで暮らす D は、サナトリウムがいかに地元の国営農場（ソフホーズ）と互恵的な関係を保っていたかを僕に力説した。サナトリウムの職員は農場を手伝い、農場からは野菜や乳製品などがサナトリウムに運ばれた。皆一生懸命に働いた。

――今では、畑もほったらかし。草が生え放題になっているのを見ると心が痛むよ。私たちがこうしていくら働いても暮らしがままならないのに、修道院じゃただの酔っ払いにまで無料で食べさせるなんて、人を馬鹿にしてるったらありゃしない！ 彼らはまるで食べ物に群がる蟻のようだよ、まったく！

D は憤懣やるかたない口調で僕に語った。

ᗢᗢᗢ

修道院の内と外の明確な齟齬は、我らが運転手にも耐え難く感じられたに違いない。僕たちと一緒に招かれて、一度はあふれんばかりの食卓についた運転手は、食事が始まるといたたまれなくなったかのように、すぐにそこからいなくなった。

――おやまあ！ 運転手はどこに逃げた？

修道院長のよく通る声が響いた後も、トラペーザの食事は長く続いた。

集団農場の崩壊、観光産業の急激な成長、修道院や教会の目覚しい復興――いずれもソ連崩壊から世紀の転換期にかけて、ロシアで同時的に生じてきた現象である。そうした変化の様々な様相が、軋りをあげて接合する場面に、僕たちは居合わせたのかもしれない。

もうこれ以上食べきれないほど食べ（させられ）た上に、お土産のパンや野菜をどっさり持たせてもらって戻ってくると、運転手はバスの運転席で僕たちの帰りを待っていた。

帰りにはあの急な勾配を上っていかなくてはならない。橋にさしかかった所で僕たちはまたバスを下り、運転手は慎重に車を動かし始めた。バンパーをこすりながら何度か試行錯誤を繰り返した後、車体を斜めにしてバンパーが斜面につかえるのをうまくかわしながら、バスは一気に坂を駆け上った。僕たちは思わず拍手して、運転手の技量を称えた。バンパーの具合を確かめるために運転席から下りて来た彼は、あの人懐っこい笑みを満面に湛えて、僕たちに向かって嬉しそうに叫んだ。

――アフトーブス　ネメーツキイ、ヴァジーチェリ　ルースキイ！（バスはドイツ製だが、運転手はロシア人だ！）

川べりに傾きかけた夕日に映えて、彼の笑顔に、隠れていた矜持がきらりと光った。

∩ᴗ∩ᴗ∩

＜カチッ＞（再生おわり）

――うーん、よく思い出されているなあ。自画自賛しちゃう！

――どれどれ…。

－了－